

学位論文の要約

論文題目 バークリの非物質論と常識

申請者 山川 仁

本論文『バークリの非物質論と常識』は、18世紀前半に活躍したアイルランド出身の思想家であるジョージ・バークリ（George Berkeley 1685-1753）の「非物質論（immaterialism）」と呼ばれる哲学体系を考察の対象とする。バークリは彼自らが常識の擁護者であることを標榜しているが、その哲学体系には一見するとわれわれが日々の暮らしを送る中で暗黙のうちに思い抱いているはずの常識的信念と相容れないような基本原理が含まれているように思われる。そこで、本論がおもなテーマとするのは、彼の非物質論を構成する基本テーゼから帰結すると思われることとわれわれの常識とがいかにして調和するのか、また、彼の哲学体系内で示されているさまざまな記述によって、われわれの常識的信念はどのように認められるのかといったことを検討することである。

序章（本論の課題と方法）では、本論の課題（第1節）と本論の方法（第2節）について言及される。第1節では、上述の本論がおもなテーマとする課題の提示が行われる。第2節では、本論が参照する文献はおもにバークリ初期の『人間の知識の諸原理に関する論考（*A Treatise concerning The Principles of Human Knowledge*）』（1710年）と『ハイラスとフィロナスの三つの対話（*Three Dialogues between Hylas and Philonous*）』（1713年）であること（以下、『原理』、『対話』と略す）、そして、これらの文献に対する解釈上の方法としては、テキスト間の通時的变化をたどるというよりは、上記の諸著作を一つの静的な体系をなすものとみなして、そこに見出されるさまざまな主張の間の内的整合性を吟味するというアプローチを採ることが確認される。

第1章（非物質論の基本体系）では、第2章以降の本論の課題の準備作業として、非物質論の基本体系がどのようなものであるかが確認される。第1節（非物質論の目的と基本枠組）では、非物質論の主要な目的が、懐疑論の論駁、無神論の論駁、常識の擁護であること、非物質論の体系がロックの物質論の体系である「物質・観念・心」の三項関係のうち物質の存在を否定するものであること、上記の二つの著作に対して後年（1734年）に加筆修正が行われ、「思念（*notion*）」という重要な概念が導入されたことが確認される。第2節（非物質論を構成する基本テーゼ）では、非物質論を構成する基本テーゼとして想定されている四つのテーゼ（集合体テーゼ、相異性テーゼ、内属テーゼ、EIPテーゼ）がどのようなものであるのかが確認される。第3節（物質の存在を否定する諸議論）では、非物質論における「物質」の存在を否定するさまざまな議論（抽象観念説批判に基づいた物質否定の議論、ライクネス・プリンシプルに基づいた物質否定の議論、マスター・アーギュメントと呼ばれる物質否定の議論、『対話』第1対話に

における物質否定の議論がどのようなものが確認され、またバークリによる物質否定の議論の特徴が確認される。

第2章(可感的な物の実在性)では、非物質論において容認される「可感的な物」は、通常われわれが身の回りの対象に対して認めているような常識的な意味において実在すると言われるに値するものなのか?という問題(「可感的な物の実在性に関する問題」)が検討される。第1節(問題の所在)では、バークリが示す集合体テーゼ、内属テーゼ、EIPテーゼからは上述のような可感的な物の実在性に関する問題が帰結する懸念があることが示される。第2節(既存の解釈)では、この問題に対して、相異性テーゼに訴えるA・A・ルースの解釈とルースを批判するS・A・グレイヴの解釈が紹介される。第3節(本論の見解)では、おもに『原理』25・34節の記述に訴えることで、相異性テーゼに訴えずに、この問題に対処する解釈の可能性が示される。

第3章(可感的な物に対するわれわれの感官知覚の直接性)では、「非物質論の下で、われわれは身の回りの物を直接知覚すると言えるのか?」という問題(「可感的な物に対するわれわれの感官知覚の直接性に関する問題」)が検討される。第1節(問題の所在)では、バークリが言及する「直接知覚」と「間接知覚」というわれわれの感官知覚の区別に伴う問題点が示される。第2節(「示唆」という考え方に付随する重要な論点)では、バークリが示す「示唆」と呼ばれる心のふるまいと集合体テーゼとの関わりについて論じられる。第3節(われわれの感官知覚に関するバークリの見解)では、われわれの感官知覚が受動的なものであるとするバークリの見解が検討される。第4節(本論の見解)では、これまでの議論を踏まえて、バークリの説において、われわれが身の回りの物を直接知覚すると認められるための本論の解釈が提示される。第5節(補論)では、同章で扱った問題と関連する論点として、ジョージ・パパスが示した見解を紹介し、そのような見解が不十分であること、非物質論における可感的な物に対するわれわれの感官知覚の直接性に関する問題を考える上では、バークリが示す示唆と呼ばれる心のふるまいが不可欠な要素と考えられることが示される。

第4章(可感的な物の存在の継続性と公共性)では、第1・3節において「非物質論において、われわれが知覚しないときも、可感的な物は継続して存在するのか?」という問題(「可感的な物の継続的存在に関する問題」)が、第4・5節において「非物質論において、われわれは同じ可感的な物を知覚できるのか?」という問題(「可感的な物の公共的存在に関する問題」)が検討される。第1節(「受動性論証」と「継続性論証」)では、可感的な物の継続的存在に関する問題を検討するにあたって鍵となると想定される「受動性論証」と「継続性論証」と呼ばれる議論がどのようなものが確認される。第2節(可感的な物の継続的存在に関する問題に対する既存の解釈)では、この問題に対するマーガレット・アサートンの解釈を紹介し、その解釈の不十分さと有効性が吟味される。第3節(可感的な物の継続的存在に関する問題に対する本論の見解)では、この問題に対する本論独自の解釈を示し、加えて、本論の解釈に伴う難点についての検

討が行われる。第4節（可感的な物の公共的存在に関する問題に対するバークリ自身の見解）では、『対話』におけるこの問題に対するバークリ自身の見解が詳細に検討される。第5節（可感的な物の公共的存在に関する問題に対する本論の見解）では、この問題に対する既存の解釈が提示されたあとに、本論が採用する考え方が示される。

第5章（現時点において知覚されていない可感的な物の存在）では、「バークリの非物質論において、未来に知覚されるであろうことがらや過去に知覚されたはずのことがらの把握はどのように説明されることになるのか」という問題（「現時点において知覚されていない可感的な物の存在に関する問題」）が検討される。第1-4節において未来に知覚されるであろうことがらが、第5節において過去に知覚されたはずのことがらが取り上げられる。第1節（危険物についての知識とその回避の手段）では、ロックの経験論と対比しながら、われわれがあるものを危険物であると知る過程とそれを回避することがバークリの説においてはどのように説明されるかが検討される。第2節（状況を不十分な仕方で察知する場合の危険回避の手段）では、われわれがある状況を不十分な仕方でしか知覚できないときでも危険を回避できるような場合について、バークリの説においてそのような場合はどのように説明されることになるのかが検討される。第3節（状況を不十分な仕方で察知できない場合の危険回避の手段）では、自らが今まさに危険な状況にあることに自分自身ではまったく気づいていないときにも危険を回避する可能性があることについて、そのような場合はバークリの説ではどのように説明されるのかが検討される。第4節（危険回避に不可欠なものとはなにか）では、これまでの検討内容を踏まえ、バークリの非物質論において、われわれが危険を知り、それを回避するために不可欠なものは言語だということが確認される。第5節（過去における可感的な物の存在）では、バークリの説において、われわれが過去の事象について話題にすることができることはどのように説明されるのかが検討される。

第6章（心の存在）では、バークリの非物質論において、心についてのわれわれのさまざまな信念はどのように説明されるのかが検討される。第1節（私の心の存在）では、バークリが私の心の存在をどのような説明の仕方で認めているのかが確認される。第2節（他の心の存在）では、バークリの説では、他の心の存在、そしてその中でも神の心の存在がどのような考え方によって認められているのかが確認される。第3節（意志としての心の存在）では、バークリの説において、われわれの心の作用はどのように認められるのかが確認される。そして、非物質論において、とりわけわれわれが自らの身体運動に対する原因であるということが認められるには困難が伴うことが確認されたのちに、われわれの身体の運動は神のわれわれの協働によるものだという解釈の展望が示される。第4節（観念とは独立したものとしての心の存在）では、「観念と心は互いに独立した存在者であるという相異性テーゼが非物質論において認められるのか？」という問題（「観念と心の相異性に関する問題」）が検討される。このテーゼを否定するような二つの既存の解釈（ジョージ・ピッチャーによるものとロバート・G・ミュールマン

によるもの)を提示したのちに、この問題に対する二つの観点からの本論独自の解釈の可能性が提示される。その二つの観点からの解釈とは、心理学的観点からのものと形而上学的観点からのものである。

第7章(バークリの非物質論の意義)では、本論におけるこれまでの検討内容を踏まえて、第1節(非物質論の哲学的観点からの意義)においては、バークリの非物質論には哲学的観点からどのような評価がなされうるかということが検討され、第2節(非物質論の現代における意義)においては、現代という時代において非物質論にはどのような意義が見出されるかということが検討される。